

A年大斎節第5主日 ヨハネ11章17―44節

〔直訳〕

- 34 そして 彼は言った、「どこに あなたがたは置いた 彼を」。
彼らは言う 彼に、「主よ、来てください。そして 見てください」。
- 35 泣いた イエスは。
- 36 それで話した ユダヤ人たちは、「見よ、どれほど彼は愛していたか 彼を」。
37 だが彼らのうちのある人たちは 言った、
「できなかったのか この 目の見えない人の目を開けた人は
行うことが この人も死なないようにと」。
- 38 それでイエスは 再び 鼻を鳴らしながら 彼自身のうちで 来る 墓に。
だがあった ほら穴が そして 石が 置いてあった その上に。
- 39 言う イエスは、「取り去りなさい 石を」。
言う 彼に 死んだ者の姉妹 マルタは、
「主よ、すでに 彼はにおいます、なぜなら四日目である」
40 言う 彼女に イエスは、
「私は言ったではないか あなたに 次のことを
もし あなたが信じるなら あなたは見るだろう 神の栄光を」。
- 41 それで 彼らは取り去った 石を。
だがイエスは 上げた 目を 上に そして 言った、
「父よ、私は感謝する あなたに というのは あなたは耳を傾けた 私に。
42 だが私は 知っていた 次のことを いつも 私に あなたは耳を傾ける、
しかし まわりに立っている群衆のために 私は言った、
ようにと 彼らが信じる 次のことを あなたが 私を 遣わした」。
- 43 そして これらを 言って 大きな声で 彼は叫んだ、
「ラザロよ、出て来なさい」。
- 44 出た 死んでいる人は 両足と両手を包帯で縛られたままで
そして 彼の顔は スダリオンを 巻き付けられていた。
言う 彼らに イエスは、
「解きなさい 彼を、そして 許しなさい 彼が 立ち去ることを」。

〔新共同訳〕

- 34 (イエスは) 言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。35 イエスは涙を流された。36 ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。37 しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかったのか」と言う者もいた。
- 38 イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。39 イ

エスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。40 イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。41 人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。42 わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」43 こう言うってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。44 すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどこいてやって、行かせなさい」と言われた。

①構成

①a 第一段落（34―40節）

この段落は、34節の「見てください」と40節の「あなたは見るだろう」によって囲い込まれている。人々がイエスに「見てください」と述べるとき、死という避け難い現実へのあきらめが含まれている。それは次のような記述からも明らかである。

⑦直前の33節で、マリアも一緒に来たユダヤ人も泣いたとある。35節でイエスも泣いているが、人々は悲嘆にくれて泣くのに対して、イエスの涙はラザロにいのちを与える神の愛を現すことへと向かう。

⑧37節でユダヤ人たちは、目の見えない人の目を開いたイエスも死に対しては無力だ、と述べている。

⑨39節ではマルタも、四日もたった死体が臭気を漂わせていると心配している。

死は、悲しんだり、落胆したり、諦めたり、人々にとってはどうにもならない現実であるが、イエスはそれを「神の栄光」を示す機会にすることができる。だから、イエスは

⑩33節では泣いている人々を見て、「鼻を鳴らして」怒り、

⑪38節では人々の言葉を聞いて、「再び鼻を鳴らして」怒り、

⑫40節ではマルタに注意を促して、「私は言ったではないか」と語りかける。

イエスにとって、死は信じる者が「神の栄光を見る」ための機会なのである。

①b 第二段落（41―44節）

この段落は、41節の「彼らは取り去った」と44節の「立ち去ることを許しなさい」とによって囲い込まれている。墓として用いられているほら穴をふさぐ「石」は、死者の世界への介入を拒絶するかのよう人の目には見える。だから、39節で「石を取り去りなさい」とイエスが命じたとき、マルタは「四日もたっている」と言って、ためらっている。しかし、人々が石を取り去り、イエスが神に祈り、「ラザロよ、出て来なさい」と大声で叫ぶと、彼は縛られたまま死者の世界から戻って、「立ち去る」ことができる。特に注意したいのは、41節後半から42節のイエスの祈

りである。この祈りに使われた動詞を追うと、次のようになる。

私は感謝する

あなたは耳を傾けた

私は知っていた

あなたは耳を傾ける

群衆のために私は言う

彼らが信じるようにと

イエスは神が「耳を傾ける」ということを感謝し知っているが、イエスが天の父と結ぶ関係は排他的ではなく、群衆がそれを知って、信じるようになるためのものである。この祈りの後に、イエスは大声でラザロに「叫んだ」とあるが、この「叫んだ」はヨハネが好んで用いる動詞である。

②鼻を鳴らすイエス（34―40節）

① イエスがラザロの葬られた場所を尋ねると、人々は「主よ、来てください、そして見てください」と答えるが、このやり取りはヨハネ1章39節で、洗礼者ヨハネの弟子たちがイエスに「どこにあなたは留まっているのか」と尋ねたときの、イエスの答え「来なさい、そしてあなたがたは見るだろう」と対応している。しかし、1章では弟子たちが光といのちに導かれるが、ここでは人々はイエスをラザロの墓に案内する。

② 人々にとっては、墓は死と闇が支配する場所であるから、そこに下ったラザロを悼んで泣き、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようににはできなかつた」と嘆く。「盲人の目を開けた人」は、9章に述べられた奇跡を指している。目の見えない人の目が見えるようになったことを知っているのに、「ユダヤ人たちは」はイエスの本質を理解できずにいる。

③ 35節に「イエスは泣いた」とある。イエスが泣いたのは、33・38節から考え、「心に憤りを覚えた」からだと思われる。イエスが憤るのは、人間を悲しみに落とす死に対してであると同時に、永遠のいのちを信じ切れない不信仰に対しても向けられている。33・38節で「心に憤りを覚える」（新共同訳）と訳されている語は、もとは馬の仕草から出ており、「鼻を鳴らす」の意味。怒りや憤懣をこめて鼻を鳴らすことを意味する。

④ マルタが「四日もたっている」と言ったのは、死の四日後には、魂が死体の周辺から完全に離れ去ると考えられていたからである。マルタはラザロは完全に死んだと考えており、そこで「彼はにおいます」と言う。26―27節によれば、イエスを信じる者は「死んでも生きる」ことをマルタは信じたはずである。それでも、彼女は具体的な心配から自由にはなっていない。イエスはマルタに「私は言ったではないか」言い、死体が悪臭を放っていると心配するマルタに向かって信仰を求める。

⑤ 人々が墓に「見る」ものは悲しみと絶望であるが、イエスは神の栄光を「見て」いる。だから、イエスは墓から石を取り去るようにと命じることができる。当時の墓は通常は横穴で、街の外や城壁の外側にあつたが、それは死の穢れを恐れてのことであつた。死の力に怒りを覚えるイエスは、ラザロを復活させることによって、人のいのちに無関心ではいられない神の力を示そうとしている。

③ラザロの復活（41―44節）

①人々が石を取り去ると、イエスは天を仰いで祈る。イエスは天の父が彼の願いにいつでも「耳を傾ける」ということに絶大な信頼をおいている。イエスと天の父は完全に一致しているが、イエスはこの一致を自分の中に隠しておこうとはしない。今、まわりに立っている群衆たちのためにも、天の父への感謝を言い表す。それによって、人々がイエスと共に神への感謝をささげることができるようである。イエスが奇跡を行うのは、天の父がイエスを遣わしたことを人々が信じるためである。この信仰が人々を真のいのちへと導く。

②41節の「あなたは耳を傾けた」は、ここでは「私の祈りを聞き入れた」の意味である。天の父はすでに願いを聴いている。イエスはそれに感謝をするために目を「上に上げる」。ラザロの復活は、地上の命を超えた「死後のいのち」を示すための奇跡である。

③43節の「彼は叫んだ」は動詞クラウガゾー。この語は新約聖書全体で8回使われるが、そのうち6回はヨハネ福音書の用例である。4回はイエスを十字架につけよと叫ぶ群衆に（一八40など）、1回はイエスを賛美する群衆（二二13）に使われている。イエスに使われるのはこの箇所だけである。イエスが「出て来なさい」と叫ぶとラザロは葬られた時のそのままの姿で墓から出て来る。

④ラザロは手足を縛られたままで、どのようにして出て来られたのだろうかと考えると奇妙である。この奇跡はこの世の命への蘇生にすぎず、いつかラザロはまた死ぬことを表しているのかもしれないが、大事なことは「死後のいのち」を証しする出来事だということである。「スダリオン」はラテン語からの借用語で、「ハンカチ」を意味し、ここでは死者の顔を覆う布を表す。

④永遠のいのちを与える者が十字架へと向かわされる

①イエスの行ったことを見た多くの人がイエスを信じる（45節）。この奇跡の最大の目的はラザロの復活そのものというよりは、この奇跡を見た人々がイエスを信じるようになったということである。イエスはラザロにいのちを与えた。永遠のいのちの源はイエスであることは、ニコデモやサマリヤの女にも示されたが、今やラザロの復活という出来事によってはっきりと示された。

②イエスを信じたのは「ユダヤ人たちの多くの者たち」であった。イエスを信じた者もいるが、なお信じない者もいる。奇跡があっても、「目の見えないままの者」には、ただの不思議な出来事で終わる。奇跡には完全な証明力はない（6・7章を参照）。イエスが「行ったことを目撃した」ユダヤ人の中には「ファリサイ派の人々のもとへ行き、イエスのなさったことを告げる者もいた」（46節）。そこで、祭司長たちとファリサイ派の人々は最高法院を召集して：「イエスを殺害する計画を練り始める。イエスの十字架は、いのちを与えたがゆえに引き起こされる。イエスは永遠のいのちをもたらす方であるのに、十字架にかけられ、死んでいく。

③ヨハネ福音書では、ラザロの復活がイエスの行った最後の奇跡になる。人間の死に対する無力感と、神への不信仰にこそイエスは挑戦し、ラザロを復活させる。この奇跡によって人間は神への感謝へと導かれる。けれども、もう一つ見落としてはならないことは、イエスはラザロにいのちを与えたことによって、十字架の死への道へと向かわされることである。いのちを与える者が命を落とすというパラドックスをヨハネは意識している。そして、イエスが復活するとき、ラザロの復活は暫定的なものから永遠の勝利となる。